

エスペランチスト長谷川テルの反戦思想 — 日中戦争下の反戦放送に至るまで —

西田千津

はじめに

今年 2022 年は、日中国交正常化 50 年の年であるが、日中関係は、残念ながら良好とは言い難い。日本社会では、中国政府の香港やウイグルの弾圧及び台湾への圧力に対する世論の疑念に乘じ、大手メディアは、日米韓軍事同盟強化を声高に叫んでいる。さらには、ネット上を中心に、偏狭なナショナリズム、排外主義が跋扈し、ヘイトスピーチやヘイトクライムといった差別・犯罪が現出している。その背景には、過去の侵略戦争の史実を否定する「歴史修正主義」の台頭がある。

一方、今年、日中戦争時、中国で抗日運動に奔走したエスペランチスト長谷川テル（以下、「テル」と略称する。）生誕から 110 年の年でもある。

長谷川テル（長谷川照子、緑川英子、Verda Majo 以後「テル」と略称）は、1912 年 3 月 7 日山梨県で生まれた。父幸之助の転勤に伴い、東京へ移住。母よね、姉幸子（ゆきこ、以後「ユキ」と略称）、弟弘の 5 人家族であった。29 年に奈良女子高等師範学校（現奈良女子大学・以後、「女高師」と略称）に入学し、奈良で学生生活を送っていたが、32 年 9 月、治安維持法違反容疑で逮捕され、女高師をやめざるを得なくなった。その後、中国人留学生劉仁（劉砥芳、劉鏡環）と結婚して、37 年に中国に渡り抗日運動に従事した。日中戦争後まもなく人工中絶手術の医療ミスで中国東部の佳木斯（ジャムス）で 35 歳の若さで亡くなった。

日中戦争下、日本では極端なナショナリズムが強要され、過酷な言論統制が敷かれた。テルは、中国の漢口で、日本語放送を通じて抗日を呼びかけたために、祖国日本の新聞で「嬌声売国奴の正体はこれ」と糾弾された¹。ところがテルは、その前に、「お望みならば、私を売国奴と呼んでくださってもけっこうです。決しておそれません。他国を侵略するばかりか、罪のない難民の上にこの世の地獄を平然と作り出している人たちと同じ国民に属していることのほうを、私はより大きい恥としています²」という文章を発表している。周恩来は、41 年 7 月 27 日、「重慶文化界在歌乐山頼家橋全家院子举行抗战記念活動」で、「日本軍国主義者はあなたを嬌声の売国奴といいましたが、実際は、あなたは、日本人民のよき娘で、本当の愛国者です」と称賛した。エスペラントを駆使し、反ファシズムの視点から日本社会の問題や中国の現状を世界に発信したテルは、中国人民と共に戦った「国際主義戦士」として、佳木斯の地に、夫の劉仁と共に立派な墓に葬られている。

小稿では、テルの短い人生のうち、日本での生活と、中国へ渡ってから漢口で抗日放送をして脱出するまでの時期までを取り上げる。ナショナリズム、民族主義との関連を中心に、エスペランチスト長谷川テルが命がけで取り組んだ反戦活動とその先見性の分析を試

みたい。テルは、プロレタリア文学作家としての確かな視点をもっており、呼びかけ文は単なるアジテーションではなく、虐げられた人を尊重し、人の心をつつ内容であった。また、テルは、日本社会に根付いていた女性差別を鋭く指摘しそれに抗う中国女性の有り様も書いている。

なお、紙幅の都合上、小稿では、同時期を描いた自伝作品である「En Ĉinio batalanta 戦う中国で³」以外は、基本的には、同時期作品のみを取り上げ、それ以降に書かれた作品については、別稿で取り上げることとする。

第一章 日本での生活

第1節 抑圧

ユキによれば、テルは小学校高学年のころ性格ががらりと変わり、とりわけ父に反抗的になった。父というより男性一般への反抗のようにみえたという。府立第三高女（現在の駒場高校）に入学してから、テルの日記には、「世の中に対する懐疑と不信、男性や権威あるものへの反感が書きつづられ、学校へ行くとみせて一日神宮外苑をぶらついたり、あるときは化学教室から劇薬を盗み出して自殺をはかった」ことが書かれていたという⁴。

女高師に入学してからテルは、奈良の美しい自然に親しむ一方で、良妻賢母を教える女高師の校風と厳しい監視にうんざりしていた。第三高女時代の友人中島郁にあてた手紙の中で、「万万が一、好意がおありでしたら、ピストル一挺、ご持参の上、わたしの胸をプスンとうってください⁵」「いやだいやだ 無茶苦茶だ。精神病になりそうなさびしさの中に、へとへとになった身心をもてあましている⁶」などと訴えている。

こうした女高師内での抑圧状況については、テルと同級生だった水野破魔子は、三人以上集まる時は、舎監に集会届を出さなければならなかったと述べ、テルが書いた小説⁷には、「善良で無意味な学生生活がむき出しにされ」、「憎悪と批判が渦をまいていた」などと書いている⁸。また、テルの一学年上であった山田雪子は、当時、中国の留学生が、いわゆる「満州」の方も含めて10人余りいたが、歴史の時間中、その人たちが総退場したり、金さんという朝鮮の学生が、許婚者が進歩的思想をもっているというだけで退学になったりしていたというショッキングな事件について触れ、「長谷川さんを運動に投げ込ませた背景には、こうした当時の学校のきびしい監視と統制もあったのだと思います」としている⁹。

テルは、後に、こうした監視体制は女高師に限らず、日本全体の問題であると考えていた。

とりわけ、教育における女性差別について敏感に感じ取り、「Japanio-Lando de barbara regado(暴政の国—日本)¹⁰」で、次のように述べている。

日本の女子は今までも小学校を除いて男子と一緒に学ぶ権利を普通持っていない。男性上位のこの国では女性は人間としてまた社会の構成員としてではなく、良妻賢母の名のもとに夫に奉公し子供を育てる存在としてのみ教育されているのである。そして最近ほんのわずかの例外をなくそうとして高等教育における男女共学の全面禁止が提案されたのだ。共学が女性を男性化して日本女性本来の美德を損なうからである。お節介な当局は中学生は丸刈り頭にするようにと言う命令を出した。そして一方では

今までも行われている中学生の校外補導を強化することにした¹¹

ここに書かれている「日本女性本来の美德」とは何を指すか。たとえば、重慶時代にテルと共に過ごした池田幸子は、テルと共に、日本人捕虜収容所を訪ねて行った時、「山川さん」という捕虜が、炊事の手伝いをテルに頼んだところ、テルは、「飯炊きするぐらいなら、中国人と結婚しなかった」と言ったという¹²から、当時女性にだけ家事労働が強いられていたこともそのひとつだったろう。また、遊郭も激しく批判している。

私の考えでは禁止しなければならないのはカフェであり芸者屋でありその類の売春宿であろう。中でも世界に悪名を轟かせている遊郭の存在である。¹³

そして、テルは、女高師の友人とともに、行動を起こすことにしたのである。

第2節 般若寺の誓い

長谷川さんと私のはっきり方針をきめたのは四年生になった春（昭和7年）4月30日の事でした。私は今でもその日のことをはっきり覚えています。雨上がりの土曜日の午後でした。散歩にいかうと手を挙げて廊下から合図をする彼女に私も同じく手をあげて答えました。荒れはてた般若寺の境内はひっそりしていました。八重桜のぼたぼたした花と山吹の真黄色なしげみの中で、私たちは一しょにやろうと誓いました。根本的にはあなたと私の考え方はいくらちがうようだけど、と彼女はいいました¹⁴。

テルの抗戦活動の出発点は、この「般若寺の誓い」であった。テルは、「根本的にはあなたと私の考え方はいくらちがうようだけど」やるだけやってみようと言い¹⁵、その言葉通り、6月から二人はエスペラント¹⁶を習い始め、文化活動を始めたのである。

北村信昭「卓上噴水¹⁷」には、北村が、天理外語マレー語科の学生だった¹⁸宮武正道の家で、6月4日から毎週土曜日にエスペラントを習いにきていたテルを含む五人の女高師生¹⁹と話をし、卒論のテーマを聞いたこと、2か月で暑中休暇となったこと等が記されているという²⁰。

大山俊峰によれば、1932年春、奈良合同労組に長戸が訪れ、文学は労農大衆と結びついてよい作品が生まれるから、実際の運動について勉強してみたいのだと告げた。長戸は、男の書体だと舎監に気づかれるから、連絡用に封筒に宛名と差出人を書いて届けると言い、数日後テルが封筒を10枚ほど持って届けに来たという。その後、6月ごろに、第一回文学サークルの集まりが持たれ、林房雄の書生であった市井清一が、「プロレタリア文学について」「唯物弁証法的創作方法」について話をし、テルと長戸は熱心にききいていた。このとき、女高師内の文学サークルの話もしていて、テル、長戸のほかにも3、4人いて、「プロレタリア文学は、一般の現代文学よりレベルが低い」というのが大体の意見であり、学校ではこの種の活動は厳しく見張られていたということも話していた。農民組合は、小作争議もやっていて、高田町に全国農民組合全国会議奈良県評議会事務所があるから、紹介するということになった。その後、テルは、奈良市高畑町の志賀直哉の家の前で、この農

民組合書記長の藤本忠良、大山俊峰と会い、労農運動とプロレタリア文学などの関連について、話をきいたという²¹。

利根光一によれば、テルの6月9日付のユキ宛の手紙には、「左翼運動ですって？感じのわるいことばですこと。いまの社会に満足できないことと同時に、いわゆる左翼運動者の態度に不満を感じていることだけ申し上げときましょう」と書かれていたようだ。利根は、テルのこの見解について、「左翼運動家のエリート意識が鼻につき、そのなかに入るつもりはなかったようだ」と考えている。ただ、「改革者の下積みの下積みの一人として、しかし女として、また教育者としてやるべき方向を受け持つことだけは動かない信念です」「あらゆるものを第三者的に批判的に見得る眼—しかも場合に応じて熱情を発し得る自信もじゅうぶんあります」ということも書かれていた²²から、テルは、「改革者」としてどう生きれば良いか模索する中で、こうした「左翼運動」と積極的に関わりをもとうとしていたのである。

その後テルは、8月には東京へ帰省して、父の反対を押し切り、ユキと日本エスペ란チ学会の夏期講習に参加する²³。

赤の二女性
退学の処分
『誠に遺憾なこと』
女高師校長語る

毒薬心中
男は絶命小
太郎落して

証物
依頼取調らる

身柄を解放
新島健三

雑音

命令



ところが、夏休みが明けて9月になり、学校へ戻ったテルと長戸は、奈良八・三〇事件²⁴に連座して、治安維持法で共に留置場に勾留された。9月13日付の大阪毎日奈良版の「赤の二女性退学の処分『誠に遺憾なこと』女高師校長語る」という記事で、仮名で二人の逮捕が報道されている。「美貌の青年をもって組織する女子指導班の触手が金城鉄壁といわれた女高師への潜入に成功」し、「両女は即日退学処分をうけた」と、テルらが、「コップ系の地下運動」員の美貌に騙されたかのようなセンセーショナルな書きようである。稲葉校長の「伝染性のある病気は隔離せねばなりません」という談話も掲載されている。八・三〇では、前述の市井清一、藤本忠良、大山俊峰も検挙されている²⁵。利根の聞き取りによれば、このとき、特高の対応は好意的であり、学校へゆるやかな処置をと頼んでみたが、学校の方では、担任（たぶん伊藤カズ）の努力で、脚気のため中途退学というような名目で、この事件は表面に出ずにすまされたということである。だがこれで、テルの「教育者」

としての未来は絶たれてしまった。

第3節 エスペランチストへの道

奈良女高師を去ったテルは、父親に連れられて東京へ帰った。姉ユキは、のちに、「妹は少しも気にしていません。妹は自分がやったことは悪い事だと思っていないからです²⁶」と書いている。また、テルは、中島郁への手紙に、

ええ、とうとう首になっちまいました。馬鹿らしいけど仕方ありません。左行進が過ぎるんですって…くだらないとは思うものの、自分としてはたいして未練のある学校ではありませんし—²⁷

と書き送っている。とはいえ、テルの逮捕と退学は、家族にとって衝撃が強く、32年10月17日、テルは門司の親戚宅に連れていかれた。ところが「向うに居ても何もする事がないし、勉強するにも、本もなく友人もないので耐えられない」と、12月12日、東京へひとりで戻ってきた²⁸。

こうした日本の抑圧的・閉塞的な社会に対する絶望感を乗り越えるため、テルが選んだのは、エスペラントであった。テルは、東京でタイプライター教習所に通い、タイプライターを購入し、33年4月から、財団法人日本エスペラント学会で、無給タイピストとして働いた。この時、大島義夫、中垣虎次郎、岡一太らが作った日本エスペラント文芸協会でもまれ、エスペラントが上達したという²⁹。

「Printempa frenezo (春の物狂い)」は、Esperanta Literaturo (エスペラント文学) 34年5・6月号に掲載されている³⁰。奈良の学校で学んでいる「私」が、家に帰りたくなり勝手に東京の家に戻ったところ、父は何も言わず、近所の人が噂すると母に責められ、奈良に帰る汽車で自殺をしたというストーリーである。利根は、「テルの女高師時代の、くるしみ、もだえ、みだれの反映であろうし、その点では、事実の重さがその向うにある」とし、しかし、小説として書けるようになったのは、テルが、過去のものとして、「その時期を客観的にみることができるようになったのだ」とも述べている。

また、同誌34年11・12月号に掲載されている「Ses Monatoj (6カ月)³¹」は、市役所に勤務していた永井が、経費削減のため突然解雇される話で、当初は失業したセールスマンや小作人に同情的だった永井が、妻子を養うプレッシャーに耐え兼ね、電車労働者ストにも無頓着になり、同じ選挙区の政治家に頼んで、ようやく再雇用となった辞令を枕の下に敷いたまま亡くなってしまったという落ちである。家族や自分のことで精一杯で、社会の変革に目が行かないまま死んでいくサラリーマンの悲哀を描いている。

テルは、また、エスペラント女性の組織であるクララ会 (Klara Rondo) に加盟している。クララ会とは、ザメンホフの妻クララの名前を冠したものであるが、クララ・ツェトキンの名もかけていた組織であり、創設者は山川菊栄の姉の佐々城松栄で、山川均「資本主義のからくり」山川菊栄「国際婦人デー」を訳して、機関紙 Sennaciulo (『無民族者』) に掲載したりしていた³²。35年2月2日、3月2日、4月6日のクララ会の例会はテルの自宅で開かれた。姉のユキが司会などしていた³³。4月29日にユキはエスペランチスト西村正

雄と結婚して³⁴大阪へ転居し、その後テルは、クララ会にはほとんど行ってないようである。ただ、葉籟士によれば、1935年、三・八国際女性デーの前に、上海世界語者協会がクララ会に原稿を依頼し、同会の推薦で、テルが、上海世界語者協会の会誌『La Mondo（世界）』に、「Virina stato en Japanio 日本婦人の状況」を寄稿した³⁵。それがきっかけでテルとの文通が始まったという。この一文は、日本の女性の地位の向上のため、以下の6点を列挙している。

- 1 女性選挙権獲得のための日常闘争
- 2 民法の改正。妻は夫の遺産を相続できないなど不利な状況の改正。
- 3 公娼制度の廃止
- 4 25歳未満の青年の飲酒禁止
- 5 助産婦の地位の向上
- 6 母性保護。主に経済的貧困が理由で多くの母親が子どもを殺し自殺する例がある。

さらに、職業の面でも女性労働者の中間搾取の統計的数字をあげ、無産階級の解放のみが、女性労働者が男性労働者と同等の権利を受けることを可能にすると結んでいる³⁶。

そのほか、テルは、エスペラント学会の雑誌「La Revuo Orienta（東洋評論）」に、「Hisorieto de Japana Literaturo（日本文学小史）」（35年2月）、「Fraulino Kiu Amas Besteton（虫めずる姫君）」（35年3月）を書いていた。

その頃、中国のエスペラント運動の成功を指針として IPE（プロレタリア・エスペラント・インターナショナル）路線を支持した中塚吉次のグループ（神戸）は、『マルシュ』に結集していたが、そこに加わった栗栖継³⁷は、「Maja Rondo マーヤ・ロンド（5月会）」というエスペラントの文学グループを作り『Majo マーヨ』という全文エスペラントの機関誌を出し、国際革命エスペラント作家同盟（IAREV）と連絡していた。やがて、グループは全国化し、テルも、中国へ脱出するまで、ほとんど毎号寄稿していたと言う³⁸。

また、葉君健によると、東京在住の中国人エスペ란チストは「中華世界語協会」という組織をつくり、毎日曜に一回集まっていたが、36年晩秋に、テルが劉仁とともに参加していたという。葉は、テルが「身振りから、発音まで」典型的な日本の女性であったが、彼らを「Kamarado（同志）」と呼び、「外国人としてではなく、エスペラントの同志と見なして」いたので、「しばらくたつとわたしたちは誰もが、かの女を日本人と感じなくなり、仲間の一人とを感じるようになった」と述懐している³⁹。

このようにして、テルは、プロレタリア・エスペラント作家として活動を始めることとなった。

第二章 中国へ

第1節 上海時代

1936年11月、テルは、エスペラント仲間の中国人留学生劉仁と結婚した。劉仁との出会いは、よくわかっていないが、築地小劇場で「夜明け前」が上演されたとき、二人で見に行っていたのが目撃されている。結婚式はあげておらず、結婚の前日、二人で健康診断を受け、記念写真を撮っただけで、別々に暮らしていた⁴⁰。寺島俊穂が指摘したように、

旧民法では25歳未満は父母の同意なしには結婚できなかったから、家父長的な理不尽な日本の法律に2人は、あえて従わなかったのだろう⁴¹。翌年3月22日、劉仁は上海へむかって旅立った⁴²。

1937年4月15日、テルは単身横浜より上海へ出帆する⁴³。当時、中日間にはパスポートもビザも必要なく、出国手続きもなかった。テルは日本警察の干渉を受けないバンクーバーとマニラ間のカナダ航路「クイーン号」で横浜から出国した⁴⁴。テルを出国させたのは、中垣虎次郎門下の中国人留学生エスペランチストグループである。劉仁も門下生であった⁴⁵。中垣、丁克（鄭克強）、黄一環、陳秋煥、李益三、葉君健は「エスペラント50年祭に日本代表を送り込むのに奔走した」という理由で捕らえられた。テルは、自分の渡航に関係があったのではないかと悩んでいる。⁴⁶葉君健は2か月思想犯として牢に入れられ、中国へ強制送還された⁴⁷。

この後、上海、香港、広州へと移動したテルの経験は、前掲『En Ĉinio batalanta（戦う中国で）』に記されているので、以下、その記述にそって足跡を追っていくことにする。

19日上海に到着したテルは、一足先に上海入りしていた劉仁と再会した。日本人だとわかると危ないので、マレー人のふりをして上海のフランス租界で暮らした。

「半裸体の苦力と豪華な高層建築が共存」している上海の風景は、「半植地的な中国の典型的な都市としての上海の本質」を雄弁に説明しているとテルはいう。

高層建築は、半裸体の苦力たちが、その汗と血で一階また一階と建築したものである。しかし、それが完成するやいなや、彼らはまた地上にもどって、ふたたび獣のようにはいずりまわる。高層建築の主人たちは、文化生活に必要な一切のものを楽しみ…彼ら（苦力たち）は生きているあいだも、死んでからも、人間として扱われない。…私は上海がきらいだ。この町はバラバラに引き裂かれた身体を想像させ、そのイメージはいたましい。⁴⁸

安元隆子は、当時、上海について書きとどめた日本の作家の例を紹介した上で、「テルのように、人間と認められず虐げられた苦力の生活の上に空に向かって高層建築が伸び、上海の繁栄があるということに気付き、それを不快として書きとめた作家が今までにあったらどうか」とテルを高く評価している。⁴⁹プロレタリア作家としての面目躍如というところであろうか。

さて、上海に到着してまもなく、前述のエスペランチスト葉籟士と張企程が家を訪ねてきた。二人は、テルにとって、真に信頼できる友人であった。とりわけ葉籟士については、「戦争中の私たちの最も困難な日々に、彼は決して忘れることのできない、どんなにしても感謝しきれない私たちの援助者となり、さまざまな意味での激励者となった」と述べている⁵⁰。

そしてテルは、早速、イギリス租界の横丁にあった上海世界語者協会を訪れた⁵¹。

この上海世界語者協会（上海エスペランチスト協会）は、1933年1月22日成立。「エスペラントを研究し、エスペラント運動を拡大し、新文化の発展に努める」という綱領を掲げ、「帝国主義戦争に反対し、中国の自由平等に資する」と主張して前述の『La Mondo 世界』を刊行していた。⁵²

テルは、7月15日には、エスペラント50年祭に参加した。その感動を次のように記している。

エスペランチストの理想と中国人民の理想とは完全に一致するのだ。エスペランチストも中国人民もともに他の民族に抑圧されることを望まないし、また他の民族を抑圧することも望まないのである。ずっと以前から中国のエスペランチストたちは「エスペラントによる中国解放のために」と書かれた旗を高くかかげている⁵³。

6月、「抗日七君子」の釈放を要求するデモが、共同租界で行われた。内戦の停戦を訴え、上海を中心に組織された「中華全国各界救国聯合会」のリーダーたちを、国民党政権が逮捕したのである。その隊列に、テルも参加した。

また、テルは、エスペランチストと共に『Ĉinio Hurlas(中国怒吼)』の発行に尽力した⁵⁴。テルは、文章を書き、仲間の原稿をタイプライターで清書し校正したのである。「日本のエスペランチストへの手紙」の中から、「…私がペンをとるとき、おさえつけられた正義の血がおどり、野獣のような敵に対する怒りの炎が燃えあがるのです。私は中国人民とともにあります！そのことに私は喜びを覚えるのです」という一節を引用し「当時はまだ日本の侵略者どもに対する中国の抗戦に公然と参加することはできなかったとはいえ、私は第三者ではなかった」と結んでいる⁵⁵。

さらに、「私は仲間たちとともに、ありったけの声で日本の兄弟たちに呼びかける。誤って血を流してはならない。あなた方の敵は、海を越えたこちらの側にはいないのだ」は、「愛と憎しみ⁵⁶」の一節である。戦火の上海で砲声がとどろき、数百人が犠牲となったことや、貧民街で「真っ黒の難民がアリののように群がっている」様子を描写している。そして「—こんな目にあわせるのはだれだ？日本か？」という問いに対して「—いや、ちがう」とテルは首を振り、「全身の憎しみをこめて」「—日本帝国主義者どもだ！」と答える。「本当の敵」は、ファシストで、「両国人民のために戦争を止めろ」と。

中国の難民を殺害しているのは日本軍で、自分自身は、その日本人であるが、侵略に反対であり、断固戦うという意思をもっている。この大量殺人を犯している日本帝国主義者に対する憤りと正義の熱情がテルを突き動かしていたといえる。そしてテルは「愛国心」についてこう語っているのである。

私は日本を愛している。親たち、姉と弟、身よりのもの、そして友人たちが一たかさんのなつかしい思い出とともに暮らしている祖国だからだ。私は中国を愛している。親切で勤勉なたかさんの仲間たちが私を困らせている、新しいふるさとだからだ。

57

また、同誌には、37年9月、テルの「Venco de Ĉinio estas ŝlosilo al la morgalo du tuta Azio (中国の勝利は全アジアの明日へのカギである)」も掲載された。

テルは、「何国民であろうとも、人間らしい心や澄んだ理性をもっているかぎり、みんな中国に同情をいただいています」と言い、エスペランチストとして、「日本帝国主義に反対するこの革命的闘争の中で、ささやかな働き場所を見つけることができた」ことは、「し

あわせなこと」だと述べる。そして、前掲の「お望みならば、私を売国奴と呼んでくださってもけっこうです…」 「ほんとうの愛国心とは人類の進歩と対立するものでは決してありません。そうでなければ排外主義です。そして、なんと多くの排外主義者がこの戦争によって日本に生まれたことでしょうか。」と続けている。日本のエスペランチストに向けられたこのテルの呼びかけ文には、ザメンホフの思想が色濃く反映されている。ザメンホフは、

私は、その出身や言語や宗教や社会の役割にかかわらず、同じ土地に住むすべての人びとの幸福に奉仕することを、愛国心と名付ける。特定民族の利益にとくに奉仕したり、よその土地に住む人びとを憎むことを、愛国心と名付けてはけっしてならない。私は、祖国や家庭への深い愛情は誰でももっている自然な気持ちであり、外部の異常な状況がこのごく自然な感情を麻痺させているにすぎないと、認める⁵⁸。

と規定しているのである。だが、テルの思いは届かず、37年12月、日本では「エスペラント報国同盟」が結成されている⁵⁹。

また、テルは、「かつて良心的、進歩的、あるいはマルクス主義者とさえ自称していた知識人までが、反動的な軍国主義者や政治家のシリ馬にのって、恥もなく「皇軍」の「正義」をはやしたてているのをみますと、私は怒りや吐き気をおさえきれないのです」と訴えている。この時、通州事件（1937年7月29日、日本の傀儡政権である冀東防共自治政府の保安隊が、日本軍人や居留民を襲撃・殺害した事件。日本軍がこの通州保安隊の兵舎を誤爆して保安隊内の抗日意識が刺激された）について、室伏高信は「事変に直面して」という一文⁶⁰で、そして山川均は『改造』37年9月に「中国の鬼畜性」と題した感想文を発表し、抗日運動を非難した。テルは、「中国の勝利は全アジアの明日へのカギである」（注2参照）でも2人を激しく批判しており、山川に対しては、「かつて科学的社会主義者であった山川均は、中国軍の『鬼畜性』についての問題をもっともらしく持ち出し、中国人民を『鬼畜以上』とののしっています」と非難している。ちなみにテルは、上海から、蘇醒の「花はいかにして開いたか」という西安事件の翻訳記事を、劉蒙暉というペンネームで『日本評論』に送り、室伏編集長から「つづいてこのような翻訳を送ってほしい」という手紙と50円の為替を受け取ったことがあった⁶¹。山川均は、クララ会の創設者佐々城松栄の義弟であった。つまり、テルにとっては、親しみ深い2人だった。「戦う中国で」の中で、テルは、中国人エスペランチスト巴金が山川均に対し公開状で反論した「山川均先生へ」から、日本軍が、松江停車場で、難民を輸送中の列車を爆撃した様子について巴金の描写を引用している⁶²。

…しかし、爆弾は投下され、後部四車輻をめちゃくちゃに破壊した。血と肉と悲鳴が四方八方へとびちった。傷つかなかった人たちは、無傷の車輻になだれこんだ。つづいて一弾が前部の車輻をつらぬいた。もはや列車に生き残った者は誰一人としていなかった。停車場の周囲ではどこでも、あわてふためいた人びとが気が狂ったように逃げまどっていた。飛行機はためらうことなく彼らを追及し、非常な低空を飛びながら機銃掃射をあびせた…⁶³

テルは、静かなフランス租界の公園で、遠くの爆撃音を聞いた時の苦しい気持ちと苛立ちを述べている。

ここから、たぶんすぐ近いところにいる日本の兵士たちに訴えかけたいと思う万の言葉は、私ののどもとまで迫ってきている。これらの日本兵は中国人の殺戮をつづけているが、その彼ら自身が日本のファシストたちの犠牲者なのである。彼らもまた傷ついたり、戦死したりすることを避けることはできないのだ。自分の敵どものために、彼らは隣人の血を流し、また自分自身の血を流しているのだ。私が話しかけたいたくさん言葉は、見ることも触れることもできないが、おそろしく強力なあるものによって、袋小路のなかにおさえつけられていて、私はそれに対して抗議したり、不平をいういかなる手だてもない。⁶⁴

そしてついに、10月27日、中国軍が上海から撤退した。11月26日テルと劉仁は、葉籟士の尽力で、上海から船で香港と広東を通過して漢口へとむかう旅に出発した⁶⁵。途中、汕頭に寄港し、みかんを食べた感激を語っている⁶⁶。テルは、45年5月『戦う中国で』を出版する際、「平和な愛すべき静かな町」であった汕頭が、日本軍の占領でいかに破壊されてきたか、「愛すべき」ものを破壊し、人々を苦しめているか悲惨な現実を追記している。

ただ一つ、心をかきむしられるようなニュースだけを伝えておこう一つだけ、そうだ、一つで充分すぎるほどだ！—そこでは、お米が、ます売りでもなく、はかり売りでもなく、実に一粒いくらで売られている、ということ⁶⁷。

第2節 広州

37年12月1日、テルは、香港に着いた。ここも、「高層ホテルが列をなしてぎっしりと立って」おり、「緑をたたえる」丘に「クリーム色の豪華な邸宅がそれぞれお気に入りのポーズで尊大に街路を見下ろ」し、「舗装されたメイン・ストリートでは軽装の西洋人がさっそうと足を運び、おしゃれな中国人の男女が腕を組んで屈託なさそうに散歩している」といった香港の近代的で魅力的な風景を描き、それと対比的に、生き生きとした労働者の描写が続く。

港のぐるりには、中国特有の貧しさが群がり、集まっている。目の鋭い車夫たち、太い綱と棒を持った仲仕たち、老若さまさまの新聞売り子たち—こんな連中が、下船する人びとに向かってあらそうように大きな声で叫んでいる⁶⁸。

このように、テルの描く「中国の貧しさ」は、憐れむべきものではなく、中国人のたくましい生活力、強さが感じられるものである。そして次に労働女性の描写がつづく。

黒い上着とズボンの作業衣を着て、ぐるりに房を垂らした黒いつば広の帽子をかぶって熱帯の強烈な太陽から顔をかくしているはだしの女たちが、海岸からやや離れて投錨している汽船から綱で引きおろされた荷物を、手なれたすばやさでボートに積み込み、陸に向かって男のような手で荒けずりのカイをこいでゆく⁶⁹。

ここにジェンダー差別はない。中国では、特に労働者階級では、女性も、港湾労働者として肉体労働でもテキパキこなせると印象づけられるくだけりである。

そしてまた、広東人についての記述も興味深い。広州は清代、唯一の外国貿易港として外国文化をいち早く取り入れ、「思想的にも行動的にも進歩」し、華僑となって財を築いた。当地で起こったアヘン戦争は、「中国人が帝国主義に抵抗した最初ののろし」であったし、その後も革命家を輩出したとテルは説明している。そして、広東の女性については、

この都市には特殊なグループが存在する。そのメンバーは教養のない女たちで、より苦悩し、より苦痛を味わうよりほかになんの取り柄もないとわかっている結婚はおことわりだという女たちと、夫や夫の両親の虐待にこれ以上の我慢はご免だと、離婚した女たちとである。彼女たちはお互いに姉妹と呼び合って、助け合っている。おおむね阿媽（女中）として働きながら生活を支えている。もちろん、こんな方法で完全な解放を勝ちとることはできはしない。しかしながら、まったく無教養な女たちが、伝統的な法律をあえて踏みにじり、婦人に対する社会の誤った取り扱いに団結して反抗しているということは、意義深く、興味あることではないだろうか？⁷⁰

と述べている。このように、テルが考えていた抗日は、同時に、封建的な家父長制の軛からの中国女性の解放でもあった。そしてこの軛は、まさに、テルが日本在住の時に感じていたものであり、日本女性にも通じる問題であったことがわかる。

さて、香港から広州へ渡ったテルは、日本人ではないかと、刑事に呼び止められる。テルは華僑で中国語が上手くないのだと説明し、劉と W 夫妻の尽力で、事なきを得るが、刑事は、テルが日本人なら劉は離婚しなければならないと言う。テルが袋叩きにされる危険があるから外出は避けるようにと付け加えて去った。そのあと、エスペランティストたちの助けで、住む場所が見つかったが、漢口に行くために、郭沫若に会いに行く。郭沫若、U さん、劉仁という日本人と結婚した 3 人の中国人が座っている中で、劉の話を書いた郭が「悲劇だね」とつぶやく。こうした日本人に対する仕打ちは、日本軍の侵略行為のせいであるとテルは理解しており、だからこそ、抗日運動に参加したいと願っていた。

私は、そうだ、抽象的世界人ではないのだ。日本人なのである。したがって、中国にいる日本人として、私は特別な義務を持っている。いつになったらその義務を果たすことが許されるのだろうか？⁷¹

その頃、テルが日本を出国したとき援助をした丁克が、広東に帰ってきた。2 月、広東国際協会が結成され、最初の国外宣伝物として、「日本人は語る」というエスペラントの小冊子を発行した。中には、鹿地亘の「聖戦の変化」「現実の正義⁷²」など、テルがエス

ペラントで訳したものなどが含まれていた。

ところが、テルは逮捕され、国外退去を命じられる。その事情については、『Flustr' el uragano 嵐の中のささやき』の中に「ありふれた思い出」として劉仁が一文を寄せている⁷³。

あの上海の戦火が、私たちを広州の見知らぬ町に追いやり、その上、彼女を暗い牢獄に閉じ込めた。そこから我々は香港のスラム街へ追放されたのだが、それでもとうとう抗戦の中心地、漢口へたどりつくことができ…⁷⁴

二人の苦難は、「不安と刺激にみちたこんな時代」では、「ありふれた思い出」なのである。「ありふれた女性」が、「自分の祖国の軍国主義者による中国での虐殺、放火、そして凶暴な砲撃戦を目の当たりにして、心にわきあがる正義の訴えを叫んでいる」のだと述べる。正義感に駆り立てられ、戦乱の中国へやってきた2人の若者は、現実にぶつかり、放浪生活を強いられた。広い中国の中で、テルは「ありふれた女性」であった。しかしそれは、プロレタリアートであり、革命の担い手ともなり得るのである。

一方テルは、出版にあたり「すこしばかり」という短文を付けている。劉仁を追って中国へ向かったとき、「私の中で青春の情熱は燃えて」いたし、「上海や香港に隠れ、さまよっていたころ、愛と憎しみが入りまじって、心の中でのえたぎっていた」と邂逅している。

鹿地亘・池田幸子の2人に宛てたテルの手紙が残されている⁷⁵。冒頭は、2人への親しみを込めた呼びかけで始まる。

鹿地さん！

池田さん！

同じ高さに並列して、二人の氏名が記されている。ジェンダーに配慮しているようだ。

あなた方が今、最も適当な持ち場について、しかも敬愛する多くの同志にかこまれて、愛する中国のため、熱愛する祖国のため、全身の努力をつづけて居られる事に心からの祝福をお送りいたします。

これは、テルが自分もやりたいと願っていることでもあった。1938年3月初めに逮捕され、郭沫若や杜重遠らの力で、出られたのはその三週間後で、国外退去の判決が下ったことが書かれている。そして、香港でテルは、エスペラントによる国際宣伝をしているが、漢口になるべく早く行って働きたいという希望を述べている。さらに、

私達は幸福だとはっきり言い切ることが出来ますね。どんなに困難がおひかぶさらうと、正義が正義で通る国で、正しい路に沿って、まっしぐらの闘争をたたかふ事が出来るからです

と書いている。日本にいては、正義が通らず、まっすぐ闘えないから中国に来たのだとい

うテルの決意を繰り返しているのである。

次に、漢口時代のテルの活動について述べてみたい。香港の放浪生活が終わり、「抗日戦争一周年の直前、ついに中国の抗戦に公然と参加する許しを得」た。漢口で抗日放送に従事したときは、「ごく短い期間ではあったが、しかしなんと興奮した、活発な、緊張した時期であったろう」とテルは書いている⁷⁶。

第3節 漢口時代

西安事件の後、第一次国共合作が実現した。国民政府は政治部を復活させ、総務庁のほかに、第一庁は軍中の党務、第二庁は民衆組織を掌り、第三庁は宣伝を掌る⁷⁷。当初、第三庁の下には第五處と第六處が置かれたが、組織の途中、蒋介石の命令で、三庁の下に第七處として「対敵宣伝處」を置くことになり、その下の日本文の製作を掌る第三科には東京帝大卒の馮乃超を科長とした。鹿地亘と池田幸子は第七處の顧問となった⁷⁸。38年4月、国共合作下、国民政府軍事委員会政治部第三庁が成立した。これは、軍事委員会政治部副部長の周恩来や郭沫若が、広範な文化人を集めて、抗戦の宣伝をしていたものである。第三庁は4月1日から活動を開始した⁷⁹。

テル夫妻は、38年6月末、国民政府に護送され、漢口へ入った⁸⁰。

『思想月報』53号には、テルが、瀬川輝子というペンネームで、1938年7月10日広州の『救亡日報』に「中国抗戦の一周年記念を祝福す」と一文を載せていると記され、全文が掲載されている。（司法省刑事局編『思想月報復刻版』53号、文生書院、41—44頁。）

テルは、「一の日本女性として」「一反侵略の『エスペランティスト』」として「正義の為闘争する気持ちを持って居た」が、「不幸にも抗戦中の中国兄弟の誤解を招き一度は冷い鉄窓の味を嘗め」、「抗戦国土外」である香港に放逐されたが、友人の助けで再び抗戦の地に戻り「広州にも来て此の光栄なる一週年を迎え得た」と書いている。テルは、7月7日には広州にいたことになっているが、実際にはテルは漢口にいたから、事前に投稿していたのだろう。

テルは、鹿地亘の紹介で国民党国際宣伝処対日科に就職した⁸¹。国際宣伝處の前身は、蒋介石を首班とする最高指導機関である軍事委員会の下に37年9月に設立された「第五部」であった。「第五部」は同年11月に廃止され、国民党中央宣伝部の下部組織に移管され「国際宣伝處」となった⁸²。テル夫妻は、上海路十五号に住み、怡和街・怡和洋行の上にある国民党国際宣伝処対日科に毎朝通い、7月2日午後7時、対日放送による第一声をはなったという⁸³。マイクの前で、日本の兵士に、この戦争は聖戦ではなく、「大資本家と軍部の野合世帯である軍事ファシスト」が「自分たちの利益のために起こした侵略戦争」と訴え始めたのである。

テルと一緒に過ごしたエスペランティスト先錫嘉は、テルの放送は、「人の琴線を動かす語り掛け」だったと述懐している。テルは、「祖国」日本と「新しい故郷」中国の両方を愛していると言い、日本兵士に向かって「誤って血を流さないでください。あなたがたの敵は海のこちら側にはいません」と「大声で連呼」したという⁸⁴。テルの放送をきいた通信兵宮西直輝は揺れ動いた心を歌にしている。

(前略)

鼻にかかった女の声す
 重慶放送 いかなる過去を持ちたる人や
 重慶放送 その流暢な日本語を
 ひそかに聞きて穏やかならず
 一九四一年九月 於 長沙戦線 通信兵 宮西直輝⁸⁵

国民党の日本語アナウンサーの仕事は、彼女にとって、たいへん重要な意味をもっていた。テルは、『戦う中国で』の「あとがき」で、漢口時代について、3 か月という短い期間だったが、「国共合作が完全に実現した」時期、つまり「抵抗戦争はその言葉の正真正銘の意味で全国的なものだった」と述べている。

前掲『思想月報』53号にはテルに関する記述がもうひとつある。『大公報』に「『九・一八』記念日に際し故国の同胞に告ぐ」というラジオ放送がなされ、その全文が緑川英子の名で掲載されたというものである⁸⁶。ここには、テルの思いが凝縮されている。

今日のこの大民族の悲痛なる記念日にあたり、我われ日本人はすべからく深く反省せねばならぬ。ただ戦争反対を表示するだけでは不十分である。すみやかに立って、反戦の積極行動をとるべきだ！平和を愛する中国の兄弟諸君、私は諸君にも大なる期待をもっている。なぜなら諸君の行動は、単に東方の一時の平穩、平和を意味するばかりでなく、日本ファッショの圧迫下にある中日二大民族の解放をも意味するからだ⁸⁷。

『思想月報』には、鹿地亘も漢口より放送をしていたことが書かれているが、毎週日曜日夜9時は、第三庁が、対敵日本語放送番組を企画したことがわかっている。9月は、テルを招いて「九・一八記念」を放送した。10月は、1日橋本、8日鹿地亘、15日テル、22日青山和夫、29日橋本と順番が決まっていた⁸⁸。

そして、1938年10月26日、漢口は陥落し、1938年11月1日、東京の都新聞にテルの反戦放送活動が報道された。「“嬌声売国奴”の正体はこれ 流暢・日本語を操り怪放送祖国へ毒づく“赤”くづれ長谷川照子」という記事である。東京に在住の父幸之助のインタビューも掲載され、幸之助は、もしもテルが「不忠の女」なら、「私は日本臣民の名誉にかけて立派に自決する覚悟をしております」と語っている⁸⁹。一方テル本人は、9月末に漢口を脱し、10月2日に、湖南省衡陽に到着していたと思われる。2人は、その後、重慶に移動しても、国民党国際宣伝処の仕事をしばらく続けるがやがて辞任し、郭沫若率いる文化工作委員会に所属する。そうした事情については、稿を改めて論じることとする。

おわりに

テルは、裕福な家庭で高等教育を受けて育ったが、生育過程で日本の女性差別、言論統制、警察権力といった権力による抑圧や弾圧を感じていた。そうした経験は、テルを目覚めさせ、科学、真理、正義を希求する心を掻き立て、志を同じくするパートナーやエスペランチストに助けられながら、正義と理想に燃えて中国に渡る決意をする要因となった。

テルはエスペランティストとして、本当の愛国心は平和的なものであり、排外主義のように人類を断絶するような物ではないという確信を抱いていた。中国では、日本軍の容赦ない爆撃を受ける中国人、租界で優雅に暮らす外国人や裕福な人々などの格差を目の当たりにしながら、そこに生きる人間としての本質を見抜こうとし、貧しい中国女性に強さを感じたりした。被害国中国の真ん中で、加害国日本の国民として肩身の狭い思いをしながら放浪したり、監獄に入れられるといった過酷な体験を経て、信頼する平和運動家の尽力で漢口に呼ばれ、国共合作下、反戦放送などの対敵宣伝に従事し、自らの役割を見出した。

このようなテルの燃えるような生き方から学ぶことは多い。偶然加害国日本に生まれただけだという言い訳はだめだとテルは言う。「ただ戦争反対を表示するだけでは不十分である。すみやかに立って、反戦の積極行動をとるべき」であり、ファシストを打倒し、愛する故郷や人々のために国際友人となって平和を築こうというテルの声は、排外主義と軍事化が進む現代で無力感に苛まれながら生きる私たちに深く突き刺さる。幸い、奈良の般若寺にテルの記念碑を作る計画が進んでいる⁹⁰。日中友好 50 年の今年に、テルの勇気は広く周知されるべきである。

なお、今後のテルの事績や、小稿で掲載しきれなかった数々の作品については、稿を改めて紹介したい。

テルの言葉を紹介するコラム▼

コラム●「お望みならば、私を売国奴と呼んでくださってもけっこうです——長谷川テル」

「お望みならば、私を売国奴と呼んでくださってもけっこうです。決しておそれません。他国を侵略するばかりか、罪のない難民の上にこの世の地獄を平然と作り出している人たちと同じ国民に属していることのほうを、私はより大きい恥としています。」

この言葉は、日中戦争中、中国にあって日本軍兵士にたいして抗日放送に従事した長谷川テル(1912~47)が日本のエスペラントティストに宛てた手紙の一部である。戦争前夜、同じエスペラントティストで夫となる中国人留学生・劉仁と命がけて中国にわたった長谷川は、上海から香港、香港から広州を経て、38年9月漢口に入り、念願の抗日活動に参加し、国民党中央宣伝部國際宣伝処対日科に配置された。

「日本の将兵のみなさん！ みなさんは、この戦争は聖戦だと教えこまれ、そう信じているかもしれませんが、はたしてそうでしょうか。ちがいます。この戦争は、大資本家と軍部の野合世帯である軍事ファシストが、自分たちの利益のために起こした侵略戦争なのです。日本にいるあなたがたの家族は、おなかをすかせて、ひどく苦しんでいます。」

(鈴木裕子)



▲テルの写真と新聞記事

出典：
『ジェンダーの視点から見る日韓近現代史』（日韓「女性」共同歴史教材編纂委員会編、梨の木舎、2005年）

註

- 1 都新聞 1938(昭和13)年11月1日付
- 2 長谷川テル「中国の勝利は全アジアの明日へのカギである—日本のエスペ란チストへの手紙」(『あらしの中からささやく声』宮本正男編『長谷川テル作品集』亜紀書房、1979年より)日本語訳は竹内義一、1937年上海で執筆。128頁。原文はエスペラントであり、高杉一郎は、「売国奴」を「裏切り者」と訳している。(「中国の勝利は全アジアの明日への鍵である」高杉一郎訳『嵐の中のささやき』新評論、1980年より、154頁)
- 3 1943年~44年に執筆された。テルが書いた「あとがき」によると、もともとは、第一部は「上海の到着で始まり、香港における亡命生活で終わる放浪生活」、第二部は漢口時代、第三部は重慶時代という計画だったというのが、結局は第二部、第三部は未完成のまま終わってしまった。1945年5月、重慶の世界語函授学社から出版。1951年12月、大阪のエスペラント通信社から謄写版の復刻版が刊行される。54年には日本エスペラント図書刊行会から、また『婦人民主新聞』(週刊)1951年7月13日~9月21日号に、宮本正男・北さとの抄訳が連載される。その後、1954年12月に刊行された『嵐の中のささやき』(高杉一郎訳・新評論社)の中にも収録され、1980年新評論から再刊される。
- 4 西村幸子「妹テルについて」前掲『長谷川テル作品集』より、283頁。
- 5 1937年3月31日付。利根光一『増補版・テルの生涯』要文社、1969年より。98-99頁。
- 6 1937年4月30日付。同99頁。
- 7 テルが校友会に投稿した小説「ぬかるみ」か。
- 8 水野破魔子「同級生、ベルダ・マーヨ」前掲宮本正男『長谷川テル作品集』より、302頁。
- 9 山田雪子「後輩、長谷川テル」前掲『長谷川テル作品集』より、288頁。
- 10 1938年5月香港で発表。
- 11 「Japanio-Lando de barbara regado (暴政の国—日本)」前掲『長谷川テル作品集』より、135頁。1938年5月香港で執筆。
- 12 池田幸子「緑川さん」前掲『増補版・テルの生涯』より、256頁。
- 13 前掲「暴政の国—日本」134頁。
- 14 利根光一「奈良の日々」前掲『増補版・テルの生涯』より、281頁。
- 15 長戸は、女学生時代の友人で共産党に入党して活動していた熊沢光子(てるこ)の影響を受け、共産党に関心を寄せていた。長戸はテルにその話はしていなかったが、テルの鋭い洞察力から見抜かれていたのだろうと推測し、そして、「彼女の性格としてはおそらく共産党を好きではなかったと思う。規則にしばられることの嫌いな彼女は、もっと自由に世の中のことを考えたかったにちがいない」と書いている。(平塚昭隆編『横井恭遺稿集(完成版)』1999年より、232頁)
- 16 エスペラントとは、ポーランドのユダヤ人ザメンホフによって作られた人工言語。ザメンホフは、国際語を普及させ、差別、支配、排外主義の問題を解決しようとした。
- 17 『奈良県観光』275号、1979年10月。
- 18 前掲『長谷川テル作品集』6頁。
- 19 長谷川テル(4年、文科)、長戸恭(4年、文科)の他に、田中政子(3年、文科)、五月女雅子(2年、文科)、一戸国(2年、理科)であったという。(前掲『増補版・テルの生涯』285頁)
- 20 奈良・長谷川テル顕彰の会『長谷川テル顕彰碑建立をめざして—奈良・長谷川テル顕彰の会第二回総会のしおり』2020年より、26-27頁。
- 21 大山俊峰「長戸恭と長谷川テル」(前掲『長谷川テル作品集』より)292頁。
- 22 前掲『増補版・テルの生涯』より、106-108頁。
- 23 長谷川よね、西村幸子『日記の中の長谷川テル』朝日新聞出版サービス、1999年より、89-92頁。
- 24 1932年8月30日未明、奈良県内の警察署が警官200名余を動員し、治安維持法違反容疑で一斉検挙が行われた。検挙されたものの中には、全農県連本部役員の藤本忠良ら、奈良合同労働組合の大山俊峰らもいた。(治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟奈良県本部『8・30治安維持法弾圧事件資料集』2013年)

- 25 前掲『8・30 治安維持法弾圧事件資料集』
- 26 西村幸子「妹を憶う」（『みどりの五月』中国旅游出版社、1983年より）372頁。
- 27 前掲『増補版・テルの生涯』より、116-118頁。
- 28 前掲『日記の中の長谷川テル』より97頁。
- 29 前掲『長谷川テル作品集』7頁。
- 30 日本語訳は、前掲『みどりの五月』に掲載。
- 31 日本語訳は、前掲『みどりの五月』に掲載。
- 32 大島義夫・宮本正男『反体制エスぺラント運動史』三省堂、1987年、88頁。
- 33 前掲『増補版 テルの生涯』131-132頁、前掲『日記の中の長谷川テル』118-124頁。
- 34 前掲『日記の中の長谷川テル』124頁。
- 35 葉籟士「緑川英子 その人と業績一序にかえて」（前掲『みどりの五月』）
- 36 酒井尚美「非戦平和に生きた長谷川テル」（編集委員会編『長谷川テル』せせらぎ出版、2007年）より236-237頁。
- 37 テルは栗栖と文通し、会いに行ったりもしていた。前掲『日記の中の長谷川テル』144頁。
- 38 ウルリッヒ・リンス著、栗栖継訳『危険な言語』（岩波新書、1975年）より、107頁。
- 39 葉君健「緑川英子に関する回想」（前掲『みどりの五月』）より379頁。
- 40 前掲『増補版・テルの生涯』148-153頁。
- 41 関西ザメンホフ祭講演レジュメ「長谷川テルから受け継ぐもの」2021年12月5日。
- 42 前掲『日記の中の長谷川テル』164頁。
- 43 前掲『日記の中の長谷川テル』165頁。
- 44 葉君健「緑川英子に関する回想」（前掲『みどりの五月』）より386頁。
- 45 前掲『増補版・テルの生涯』155頁。
- 46 前掲『長谷川テル作品集』37頁、112頁。
- 47 ちなみに、葉君健は武漢で政治部第三庁に入っている。（葉君健「回想」388頁）
- 48 前掲『長谷川テル作品集』26頁。
- 49 「中国抗日民族解放運動と長谷川テル—『戦う中国で』論—」『国際文化表現研究』2号2006年より257頁。
- 50 「戦う中国で」前掲『長谷川テル作品集』34頁。
- 51 同35頁。
- 52 同30頁。
- 53 同36頁。
- 54 1936年4月創刊。全世界の人が連帯してファシズムに対抗しようと呼びかけ、日中戦争は人類の平和にとって巨大な威嚇となるだけでなく、人類の文明を踏みじめるものだと主張している。陳旭暁「20世紀30年代中国的世界語運動研究」中共中央党校修士論文 23—24頁、ソ連の作家セルゲイ・トレチャコフ Sergei Mikhailovich Tretyakov の戯曲「吼えろ中国」（中国の労働者の反植民地闘争を描いた。1926年）からとった。陳旭暁23頁、前掲『長谷川テル作品集』112頁。
- 55 前掲『長谷川テル作品集』40-41頁。
- 56 「Amo kaj malamo (愛と憎しみ)」1937年8月。（前掲『長谷川テル作品集』124頁）
- 57 前掲『長谷川テル作品集』126頁。
- 58 ザメンホフ『国際共通語の思想』（岩波新書、1950年）102頁。
- 59 初芝武美『日本エスぺラント運動史』（財団法人日本エスぺラント学会、1998年）より102頁。
- 60 『日本評論』1937年10月
- 61 「戦う中国で」前掲『長谷川テル作品集』31頁、その翻訳記事「花はいかにして開いたか」は、同書257頁掲載。
- 62 同52頁。
- 63 同53頁。
- 64 同54頁。
- 65 同60頁。

- 66 ちなみに、横浜を出港するときも、ユキがみかんを買いに行っている。テルは、みかんが好物だったようだ。
- 67 同 71-72 頁。
- 68 同 72 頁。
- 69 同 72 頁。
- 70 同 96 頁。
- 71 同 102 頁。
- 72 ‘Reala justo’ 1938 年 2 月（前掲『長谷川テル作品集』）より 348 頁。
- 73 1941 年 10 月重慶で執筆。
- 74 劉仁「ありふれた思い出」（前掲『長谷川テル作品集』）より 117 頁。
- 75 鹿地亘資料調査刊行会『日本人民反戦同盟資料』第 3 巻、1995 年、不二出版。
- 76 前掲『長谷川テル作品集』108 頁。
- 77 郭沫若『抗日戦回想録』（中公文庫、2001 年）より 26-27 頁。
- 78 同 63 頁。
- 79 同 67 頁。
- 80 孫金科、于景鴻「日本作家緑川英子の反戦闘争」『抗日戦争研究』1995 年 2 期。136 頁。また、宮本正男は、「郭沫若、葉籟士、田漢、鹿地亘が奔走して釈放され、漢口入りを許された」と書いている。前掲『長谷川テル作品集』123 頁。
- 81 テルから鹿地亘宛手紙に、「紹介者たるあなた（鹿地）に何のご相談もしなかった」とある。（鹿地亘資料調査刊行会『日本人民反戦同盟資料』第 10 巻、1995 年 不二出版）
- 82 梅村卓「OWI 関係史料からみた検閲をめぐる国民政府とアメリカの対立」『西南学院大学 国際文化論集』第 35 巻第 1 号 2020 年 9 月 118-119 頁。
- 83 坂井前掲論文、242 頁。
- 84 先錫嘉「緑川英子同志を偲ぶ」（前掲『みどりの五月』）より 402 頁。
- 85 坂井前掲論文、232 頁。堀鋭之助という名にしているものもある。（張寅「浅析抗日戦争時期緑川英子対日広播的伝播活動」『中国広播』2015 年 11 期）
- 86 1938 年 11 月の『思想月報』53 号には、「九・一八」記念日の夜、鹿地亘、長谷川テルら 4 名が、「九・一八記念に際し故国の同胞に告ぐ」というラジオ放送を行ったと記載されており、そのラジオ放送の内容も掲載されている。また、1938 年 9 月 22 日付の『大公報』に、その記事が掲載されたとも書かれているが、実際に記事が載ったのは 19 日付『大公報』である。（『大公報 影印』人民出版社 1982-1983）
- 87 作品集に資料として掲載されている。338 頁。
- 88 廖利明、仇玉勇「国民政府軍委会政治部第三厅与抗战广播」（『郭沫若学刊』2018 年第 2 期。11 頁。）
- 89 この都新聞の記事は、1938 年 11 月 10 日付「新華日報」に翻訳掲載された。
- 90 奈良・長谷川テル顕彰の会が計画を進めている。（奈良市北永井町 277-3 田辺方）